

主に「自然との関わり・生命尊重」が育った実践

活動名 やもりがいたよ！ (9月)

保育者の願い（ねらい）

- 生きものに興味や親しみをもって関わり、関心を高める。
- 生きものの飼育をとおして、命あるものの存在に気づき、大切にしようとする。
- 生きものを飼育し、観察することをとおして、生きものの変化や特徴に気付く。
- 生きものの飼育の方法について調べたり、考えたりしたことを伝え合おうとする。

援助のポイント

- 子供たちが生きものと出会い、飼育をしている時の思いや気持ちを感じ取りながら、子供たちと共に驚いたり感動したりする。
- 子供たちが何気なくつぶやく言葉を見逃さず、そのつぶやきの基にある思いを大切にする。
- 子供たちの「こんなことがしたい！」という思いを最大限に尊重して、それを実現できるようにする。

環境構成の工夫

- 子供たちの「こんなことをしてみたい！」という思いを大切にして、そのような体験ができるよう、道具や素材等を準備しておく。
- クラスの友達同士で思ったことを言葉にするのを手伝ったり、みんなでその話を聞く場を設けたりして、みんなで考え、伝え合う場をつくるようにする。

これまでの経緯

- 4月に「アリを飼いたい」と子供から提案があった。飼育の方法を図鑑で調べて飼育を始めた。
- 5月に子供がアメンボを捕まえ、飼育ケースに水を入れて飼育を始めた。他の子供たちも、飼育ケースの中の水の上を上手に動くアメンボに関心をもち、みんなでアメンボの飼育をすることになった。子供たちは、自分たちで飼育の方法を図鑑等で調べ、協力して飼育をした。しばらく飼育したが、アメンボは死んでしまった。「どうすれば元気に生きられたのか」をみんなで話し合った。子供たちはアメンボの気持ちになって考え、「きちんと餌をあげればよかった」「もっと広い場所で育ててあげればよかった」という考えが出た。それから、みんなでアメンボのお墓をつくった。
- カブトムシの飼育をした。図鑑で調べて、飼育ケースに土を敷き詰めて飼育環境を整えた。カブトムシの餌も調べてみんなで準備をした。いろいろな餌をあげたところ、「ゼリー」に土が被っていたり、よく減っていたりすることに気付いた。夏休みの間に飼育ができなくなるカブトムシをどうするかをみんなで話し合った。その結果「樹液の出てる木に逃がそう」と決めて、自然に返した。



9月の活動内容

- 9月の始めに遊戯室でやもりを見付け、飼育を始めた。
- やもりの飼育の方法を、図鑑を使って調べた。園庭で拾った砂や木の枝や落ち葉、廃材コーナーのカップ等を使って自分たちだけで飼育環境を整えた。
- 保育者は、子供たちの主体的な行動を見守った。
- みんなで飼育をする中、「やもりがやせている！」と、やもりの変化に気が付き、やもりのことを心配した子供たちはどうすればよいか話し合った。
- 子供たちは、アメンボやカブトムシを飼育した時のことを思い起こしながら、自分たちで「ヤモリを逃がしてあげる」ことに決めて、自然に返した。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の表れ

- やもりやアメンボ等の生きものを大切に飼育していた。 (自然との関わり・生命尊重)
- カブトムシやアメンボが元気に生きていくためにどうすればよいのかを考え、友達と話し合っていた。 (自然との関わり・生命尊重) (協同性) (言葉による伝え合い)
- 生きものを大切に飼育するための方法を調べていた。 (自然との関わり・生命尊重) (自立心)
- アメンボやカブトムシ等の生きものが元気に生きるために、餌の準備をしたり、飼育の環境を整えたりしていた。 (自然との関わり・生命尊重) (豊かな感性と表現)
- クラスの友達と協力して生きものの飼育をしていた。 (自然との関わり・生命尊重) (協同性)



小学校教育とのつながり

- 生きものに愛情をもって育てたり、その生きものを大切に育てるためにどうするとよいのかをみんなで話し合ったりする体験は、特別の教科道徳の「生命の尊さ」・「自然愛護」の学習につながります。
- 身近な生きものに興味・関心をもって、その飼育の方法を調べたり、飼育をしたりする体験は、理科の「生きもの」に関する学習につながります。
- 生きものの飼育の方法について、図鑑などを使って調べることは、国語の「読むこと」の学習につながります。

